

## 記憶の塔

昨年の三月にブルーストの『失われた時を求めて』を映画化したものを見て、改めて芸術における追憶の機能について思い巡らした。ワズワースは「詩は静寂のうちに回想された感動である」という有名な定義をくだした。しかし、近代文学には彼の素朴な美学は当てはまらない。詩の中の追憶は決して単純な経験の再現ではなく、複雑な無意識の変化を伴うものだからである。『ブルーストとシーニュ』でジル・ドゥルーズは、『失われた時を求めて』の中での記憶作用とシーニュの関係を明快に解き明かしている。

西脇順三郎にも「失われた時」という長詩がある。しかし、そればかりでなくこの詩人の作品はすべて追憶の詩であると言っている。第二次大戦後の改作版『あむはるわりあ』のあとがきに、作者は自分の旧作の詩法についてつぎのように述べて

いる。「是等の詩に出ている現実の多くは、実際の人生の歩みの記憶というよりも、文学を好んで読んだその淋しい追憶にすぎない。」（詩情）。つまり、西脇詩の世界は経験をそのまま再現したものではなく、新しい思考をつくるために記憶を活用したものである。

一九八二年に筑摩書房から出した私の『西脇順三郎全詩引喩集成』は、その点に着目してこの詩人の作品を構成している文学の記憶を検証したものであった。一部のひとは「伝記的研究」と混同されたり、あるいは昔ながらの訓詁注釈の書物と早合点されたが、私の意図はそのいずれでもない。西脇詩の世界を構築している豊富な引喩の典拠を質して、この詩人の記憶作用の仕組みを理解する基礎資料を提示したかったにすぎない。そのうえで読者各自に委ねられている「解釈」の作用は避けて

新 倉 俊 一

おいた。むろん、このような膨大な作業は私ひとりでは到底できない。さいわい、詩人が存命中であられたので、晩年に毎水曜日にお宅に何って数時間も質問をすることができた。最近、初台のオペラ・シティーに出かけたとき、バスで代々木八幡のそばを通り過ぎて、急になつかしさがこみ上げてきた。先生の白い斜塔のような家は没後まもなく取り壊されて、いまは私の記憶の中しかない。

西脇順三郎はごく晩年まで記憶力が抜群の方で、私が問題の詩行を読み上げると、「ああ、それはアレです」と言われて、二階の書齋に原本を探しにいかれた。先生の蔵書の大半は戦火で焼かれてしまい、疎開してあった一部の本(三千冊)は、現在、津田塾女子大の図書館にある。そのために、ときにはそこまで足を運ばねばならぬこともあったが、たいていは先生のポルヘスのような記憶の図書館の中につまっついて、私はただ「オーブン・セサミ」の呪文を唱えればすんだ。一日の仕事が無事に終わると、奥様の(なくなられてからは、若奥様の)手料理をまえに、剣菱の銘酒で乾杯をするのが慣わしだった。そして別れ際に、先生は「まだ問題がありますから、ぜひ来週もやりましょう」といつも念を押された。あたかも物語が終わるのを恐れるかのように、こっして私たちの千一夜のおとぎ話は続けられた。

さらに、この『引喩集成』の仕事の発端は、一九六六年から十人あまりの詩人や俳人と七年間にわたって催してきた通称

「西脇セミナー」と呼ばれる月例研究会にあった。これは、安藤一郎宅で英詩のモダンイズムの研究をやっていた仲間のうちで、中桐雅夫さんあたりが「西脇さんのモダンイズムもいまのうちにやっておかなくちゃ」と言い出して、鍵谷幸信が詩人たちを集めたのだと記憶している。この会については、最近文庫版が出た加藤郁平の『後方見聞録』の「西脇順三郎の巻」につきぎのよう

に紹介されている。

西脇順三郎のポエトリーを詩人ご自身からお聞きしながら研究したいという、いわゆる「西脇セミナー」がはじまったのは昭和四十一年の五月十九日。(省略)二年目くらいまでは楠本憲吉の計らいで新橋演舞場裏の料亭「灘万」の一室を使わせて貰い、以後、先生宅、目黒の「みやこ荘」などと場所を移した。テキストも『あんばるわりあ』からはじめたが、「ギリシャ的抒情詩」を喋り合っているとき、庭ひとつへだてた隣家の四畳半あたりから長唄のオサライが聞こえてきたりした。

当初のメンバーは、安西均、鍵谷幸信、加藤郁平、楠本憲吉、諏訪優、関口篤、那珂太郎、中桐雅夫、新倉俊一、福田陸太郎、藤富保男、松田幸雄、それに横部得三郎と記載されているが、その半数はもう鬼籍に入ってしまった。正確に言えば、このうち、西脇先生のご従弟で、慶応でフランス語を教えていられた

横部さんは、少し遅れて途中から常連に加わられた。初めのころ、私たちが細かい詩の背景の事実を詮索しているのを傍らで聞いていて、真顔で「詩というものは、こんな読み方をするものじゃないんじゃないですか」と異議をはさまれた。これには西脇先生も苦笑されて、「ここにいる人はみんな専門家だから、それは心得て喋っているんですよ」と言われた。この説明を受けてからは横部さんもすっかり納得して、私たちの詩的雑談に積極的に加わられた。なにしろ、郷里小千谷の幼年時代から留学前後の西脇先生の日常生活までよく知っていたら、昔の話になると雄弁をふるってみんなを楽しませた。その一部は「順様のこと」という名文で『回想の西脇順三郎』（三田文学ライブラリー）の中に収録されている。興味のある方には、ぜひ一読をお勧めしたい。

西脇詩は戦前からよくシニールリズムと短絡されて、現実のかけらもないただ夢を書く詩人ときめつけられてきた。だが、先述の「詩情」でも、「今日の多くのシニールリズムの芸術は人生が破壊された廃墟にすぎない」と言われている。そして「このいたましい現実から遠ざかれれば遠ざかる程その詩の現実性が貧困になる」と付け加えている。このように、西脇詩は現実と夢、経験と追憶の織り成すタペストリなので、私たちの読解の仕事もその両方にまたがらなければならなかった。

西脇セミナーが始まって一年たったころ、例の横部さんも一緒に西脇詩の実地踏査をしようと、みんなで湯ヶ島温泉まで一

泊旅行にでかけたことがある。それは一九五三年の四月九日に、西脇先生が同地に旅行をされて、「近代の寓話」というすばらしい詩を書かれていられるからだ。そこで詩人ご自身にも同行ねがって、ひっそりと落合楼に着いてみると、「西脇セミナーご一行様」と仰々しい看板が出ていて、ちょっと気後れがした。しかし、部屋にはいるや否や、早速に詩のテクストを読みあつた。冒頭から十行目に、「形而上学的神話をやつている人々と、ワサビののびる落合でお湯にはいるだけだ」とある。

これは実は「猥談」をしている同僚のことだという説明をうかがって、さすが西脇流のアイロニーだと哄笑した。つねに反対の表現を好む西脇詩のスタイルを知らないで、まじめに文字通りに理解すると、とんでもない誤読をしてしまう。六行先の「われわれ哲学者」はこわれた水車の前で記念の写真をとったという記述も、同じアイロニカルな表現なのはいうまでもない。また「夜中幾何的な思考にひたつた」というのも、「あまりに人間的な」悪夢のアイロニーにちがいない。こうしてみると、「近代の寓話」はただのつまらない痴話のルポルタージュにすぎないのが、と速断される向きもあるかもしれないが、決してそうではない。これらの詩行に先立つ四行目あたりには、「考える故に存在はなくなる 人間の存在は死後にあるのだ 人間でなくなる時に最大な存在 に合流するのだ」という、詩集『旅人がへらす』の思考に共通する詩行が置かれている。この真に形而上的な思考と非形而上的思考の世界が連結されてこそ、

西脇詩の世界は成立する。

旅先ではよく眠れないのは先生の常で、横部さんの話によると、その晩も先生は服を着たままうたた寝をされたらしい。そして朝早く起きられて、われわれとテクストに沿って「ネッコ川」（猫越川）のほとりを「セコ」（世古）の宿まで散策された。詩には「ひとりでネッコ川のほとりを走る」と書いてあるが、先生は「こう書かないと詩にならないですよ」と笑われた。この朝の散歩の記述のあと、詩行は一気に西脇的非日常の表現に変容する。

岩にしがみつくと青ざめた葎、シャガの花

はむらがつて霞の中になたれていた

私の頭髮はムジナの灰色になつた

忽然としてオフィーリア的思考

野イチゴ、レンゲ草キンポウゲ野バラ

スミレを摘んだ鉛筆と一緒に手に一杯

にぎるこの花束

このたおやめめ思考は、いかにも『旅人がへらす』に出てくる幻影の女の思考に近い。後日、先生のお宅で那珂さんが、たまたまこの詩行にふれて、「オフィーリア的思考」という言葉はやや観念的ですね、ともらしたところ、先生は真顔で反ばくされて、「こういふ思考の連結のおもしろさをみなさんがわから

ないのは残念だ」と言われたことを、印象深く憶えている。

とにかく、西脇詩の追憶は決してナイーヴな現実の想起ではなく、想像力を自在に駆使して遠いものを連結することを習性としている。これはブルーストの追憶の想像力に通じるものである。たとえば、留学から帰国後の三田界隈の都会風景を扱った詩では、伊皿子の地名が「伊皿子人」なる時代と種族をこえた名称に変容したり、場末のチンドン屋が古代の牧人と連結されて、「チンくドンく」はおれの生誕の地に住む牧人の午後なり」となる。末尾の言葉がマラルメの「牧神の午後」にかけられていることは言つまでもない。さらに、題名の「内面的に深き日記」もボードレルの深刻な「内面的日記」に抵抗して、わざと自分の表層的な世界を反語的に呼んだものである。

『アムバルワリア』製作時代の生き証人としては、当時まだ佐藤朔や滝口修造などがえのない方々が存命されていた。

一度、「馥郁タル火夫」を取り上げたときに、その詩の初出誌「馥郁タル火夫」の編集人であった前者をゲストとして招いて、いろいろ逸話を聞かせてもらった。ある晩、滝口さんが西脇宅に同行して、例の有名な序詩を徹夜で書かれるのを目撃したとか、まるで昨日のことのように鮮明に語られるのを、私たちは大いに楽しんだ。滝口さんのほうはもともと寡黙な存在で、西脇セミナーのようなにぎやかな会に出席される気持ちはさらさら無かった。しかし、一度だけその姿を近くで見かけたことがある。それは西脇先生の個展を機に詩画集『薔（タク）』が

刊行されたときのこと、青山の喫茶店「パッタ」の地下でお祝いのパーティーが催された。三十人あまりの親しい人たちが集まり、安東次男や、池田満寿夫、土方巽なども混じっていたことを覚えている。話が弾み、西脇先生も興に乗られて手当たり次第に幾人もの似顔絵をスケッチされたりした。山場が過ぎたころ西脇先生が立ち上がられて、ひとり帰ろうとなさったが、そのとき階段まで付き添って一歩一歩先生の足元を見守られたのが滝口さんだった。その恩師にたいするやさしいたわりに、私は奥ゆかしいものを覚えた。その折、滝口さんは傍らにいた私を振り返って、「先生はいつもこうなんですよ」と話しかけられて、はにかむような笑いを浮かべられた。これが「太陽氏」とのわたしのただ一回の会話だったが、その印象は忘れがたい。晩年に西脇先生は滝口さんに「テンゲンジ物語」という回想の詩を送られている。

ピヒョークサイ！

われわれは最近発見された

新しい関係にかくらんされたが

まだ読本の幼稚へもどる

術を弄することを知っていた

・  
・  
・

サラセンの小麦をたべに

醤油のしみた黒い階段の下へ

われわれは集つて

ステーンレスのほそながい

バベルの塔の構作を

脳髓の陰謀としてたくらみ

それを書写真にとつた

という詩行がその中にある。いうまでもなく、これはシュールレアリズムについて互いに熱心に語り合った西脇宅の天現寺時代の追想だが、この「バベルの塔の構作」という比喩の中に、西脇式記憶術はみごとに象徴されている。それは決して過去の時間の再現でなく、想像力による恣意的な再構築なのだ。『アムバルワリア』の全作品は、その恣意性において顕著であるが、その後の詩集も手法的には変わっていない。

その言葉による「バベルの塔」の再構築の面だけを極端に強調すれば、西脇詩は「純粹な修辭学」になつてしまふ。ニユークリティシズム以来、作品と作者とを分離することは批評の原則と化し、歴史と批評とは水と油のように相容れないものになった。最近の脱構築批評に至つては「ニーチェの言つたように「真理と言つたものは無く、ただ解釈だけが存するのみ」で、批評は読者の頭の数だけある。かつてショーペンハウエルは「八工をたたきつぶしたところで、八工の物自体は死にはしない。単に八工の現象をつぶしたばかりだ。」とつぶした。だが、もはや「物自体」も消滅している。一九八二年に西脇順三郎が

没してから二十年を経ているのに、いまだに本格的な伝記が現れないのは寂しい。一つには今日の批評がその成立を妨げているのかもしれない。伝記と批評との乖離した状況を、作者自身の詩と散文の追憶作用を介して融和させることはできないものだろうか。「あのまた 悲しい裸の記憶の塔へ もどらねばならないのか」(「坂の夕暮」)という作者の嘆きは、その解読へのいざないでもある。